

『宮沢賢治
物語退治』

保坂
歩

□ 宮沢家・外観（四年前・雪）
雪が厳かに降りそそいでいる。
空は不思議と明るい。

□ 宮沢家・広間
厳かな葬儀が行われている。
喪服に身を包んだ人々。

N 「けふのうちにとほくへいってしまふわたくしのいもうとよ」

N 「『宮沢トシ』と書かれた位牌。
みぞれがふっっておもてはへんにあかるいのだ」

粛々と読経する僧。

悲しみにくれ、涙する人々。

N 「死ぬといふいまごろになって……こんなさつぱりした雪のひとわんをおまへはわたしにたのんだのだ」

広間の下手、人々の背後に男が呆然と立つ。

右手には西洋製のハイカラな手帳。

N 「もうけふおまへはわかれてしまう」

男は宮沢賢治。

くやしそうなその表情。

手帳を強く、握りしめる。

N 「ほんだうにけふおまへはわかれてしまう」

□ 鉄道（夜）

満天の星空。

蒸気機関車が、風を切って駆けていく。

字幕 『昭和4年・岩手県 花巻』

□ 下根子桜・山道（現在）

険しい道を登っていく、農民らしき中年女。

女 「もうじきだなっす」

女の後を、黒袴の和装の男、浦島信（三

六）と、長身で無表情な、妹の奇子（一

四）がついていく。

奇子は喪服のような黒一色の着物。

浦島「親切な顔は見えない。浦島「親切なご案内：いたみ入りますなあ」

女「なしゃんも」
愛想よく笑う女。

□ 羅須地人協会 玄関前
ガラスをふんだんに使った、ハイカラな

窓の建物。

宮沢賢治の独居、羅須地人協会である。

農民の女と浦島達、山道からへとへとになつてやつて来る。

浦島「神妙そうに建物を見上げて。

女「きそうに珍妙な屋敷ですな」
女「ありやあ」

玄関脇の黒板、『下ノ畑ニ居リマス』の文字。

女「いねみでえだな。こごいらで待ってれば
浦島「そのうち来っけども。どうする？」

浦島「：畑は、北上川の方でしたかなあ」

□ 雄大に流れる北上川

□ 河畔の畑

しおれて枯れた農作物が、沢山並んでい

る。黒い山高帽にコートという格好で、曇つ

賢治「お天道は相変わらずだなあ：」

畑の脇、学生服に赤ら髪の三郎（一〇〇）。
賢治をつまらなそうに見る、切れ長な目。

腰に、布で包まれた棒状のものをくくり
つけている。

三郎「空もお前の陰気に合わせとるんかの」

賢治「三郎は、なぜか老人言葉。
賢治「ひどいな三郎。俺はこの通り満ち足り

ているさ」
三郎「そんな人間は、詩など書かんものよ」

賢治「（笑い）そうかも、な」

浦島の声「宮沢賢治先生でおられますかな？」

賢治、声に振り返ると。

浦島「目が大きく平べったい顔だ。異様に

その後ろには無表情な奇子。

浦島「おお、やはりそうですな」

賢治「失礼：どなたでしたっけ」

浦島「私、郷土史家の浦島と申します。同志である佐々木喜善先生の紹介で：」

奇子と三郎、ふと目が合う。互いに、探るような視線を送りあつて。

□ 羅須地人協会・教室

杉板張りの部屋、丸イスが円状に並ぶ。

賢治、浦島、奇子が向かい合って座っている。

窓際に立つ三郎、怪訝そうに三人を見回す。

三郎「：」

浦島「紹介が遅れましたな。これは私の妹で

奇子と申します。ほら、挨拶を」

奇子「：奇子です、よろしく」

浦島「奇子、唇を開けず腹話術師のように話す。

浦島「妹も、先生の童話の読者ですな」

賢治「光栄です：読む人がいるだけでも」

浦島「浦島、懐から本を取りだす。

「注文の多い料理店」の表題。

浦島「これは童話の枠に収まるものではありません

ませんなあ」

賢治「さっぱり売れないんですがね」

浦島「売れば良い、というものでもありません

すまい。浅薄な世相と先生の作風は別の次元

の所産です」

三郎「：見えすいとるわい」

賢治「三郎を睨みつける奇子。

浦島「ハハ：で、なぜわざわざ花巻まで」

クとしておりましてな。ぜひ、この周辺の

民俗風土を採集したいと考えまして」

賢治「僕に佐々木先生の役回りをしると：？」

柳田国男に語ったように：しかしそんな面白い話があるかな」

浦島「ありますとも。先生自身書いておられる」

と、『注文の多い料理店』を指差す。
表題の上に、『イーハトヴ物語』とある。
浦島「そう、先生ののおっしゃる隔世の楽園：
『イーハトヴ』にでしたらね」

□種山高原・草原
字『種山高原』

牧草や花々が咲き乱れる草原。
遠くには雄大な山並み。

小柄な少女の幻が、草原を駆けながら叫んでくる。

それは少女時代のトシ。七、八歳ぐらいである。

トシ「はいさんあれはしろつめくさ」
幻はそこら中に現れて。

トシ「向こうのはあやめねにいさん」
トシ「あれはね：聞いてるのにいさん？」

トシ「はいさんはいさんはいさん」
その光景を憂いの目で眺めていた賢治。

浦島が後ろから近づいてきた。
我に返る賢治。

浦島「ふつと幻が消える。」
「いやあ、百姓にでも案内してもらおう

と思つとつたんですが、あの方言、南国生まれには辛くてね」

賢治「独居自炊、普段は時間を食い潰す毎日です。お気になさらず」

浦島「（草原を見渡し）それにしても美しい素晴らしい。遠野郷もかくあらんといったところですか」

賢治は片手に手帳を握っている。
浦島「それをちらりと盗み見る浦島。」

浦島「それは妹と遊びに来たもんです」
「それがイーハトヴの一つの原風景というワケですな」

賢治「岩^イ手^ハに：よほどの興味か？」
浦島「常^ハ世^トこそを私は見たいのです」
賢治「：：：どうやら齟齬があるようだ」
賢治、苦笑い。

□ 同・林の入り口

木によりかかっている三郎。奇子がそれを横目に睨む。

三郎「：：：なんじやい」
奇子「お前：：：なにもの？」

三郎「奇子は相変わらず唇を動かさず話す。」
奇子「：：：わしは賢治のお守りじゃ」

三郎「：：：フン。逆でしように」
奇子「：：：お前は口を開けて話が出来んのか。」

三郎「デクのようなじゃな」
奇子「大きなお世話よジジガキ」

三郎「な：：：何じゃとお」
奇子に詰め寄る三郎。重力を感じさせないような、三郎の軽い足取り。

三郎「しかし、長身の奇子に見下ろされる形に。」
さげすむような奇子の目。

三郎「怒りがこみあげてくる。」
と、三郎の方から奇子に向かって突風が

吹いて。
柔らかに揺れる奇子の髪。

奇子「：：：ふらふらしちやつて。お化けみたい」
三郎「貴様：：：」

浦島の声「奇子、何をしている！」
奇子「すぐ行くわ、兄様！」

三郎「と、三郎を横目に去る。」
三郎「カンに障るおなごじゃあ」

いきりたつ三郎。

□ 元の草原

浦島「話している賢治と浦島。」
浦島「お深いそうに宮沢先生は、民俗学にも造詣が

賢治「お深いそうに」
浦島「ならば山人も、ご存じでしような」

賢治「願わくばこれを語りて、平地人を戦慄せしめよ：ですか」

闇夜の山中。大男の山伏やら異様に髪の毛の長い女やらがうごめいていて：
皆一様に大きな目を光らせている。

浦島のN「左様。山深きところに住む人に似て人に非ず者。ときとして鬼：ときとして

賢治のN「日本人、つまり僕たち大和民族よね」先にこの国に住み着いた土着人：でした

浦島「いやはやその通り」
賢治「文学的幻想：ですな」

浦島「そう思われますか」

賢治「おとぎ話の山男でしょう」
浦島「：：：そうなのでしようなあ」
林の方から来る奇子。無表情。

□丸メガネのような形のめがね橋

□賢治の回想（七年前）

めがね橋の下。
素朴な小豆色の着物姿のトシが座り、賢治の手帳を読んでいる。

透き通るように白く、美しいトシ。
その隣、慈愛の目で見ている賢治。

賢治「：：：どうだ？ 着想はおもしろいぞ」
トシ「素敵な話になりそう。不思議な名前ね、

風野又三郎って」
賢治「完成したら一番に読ませっがら。だから元気でいれよ」

トシ「：：：ありがとう：：：ねえ兄さん」

トシ「私に赤ちゃんが出来たら、又三郎から名前をもらえますか？」

賢治「（赤面し）な：：：何ゆってらの」

トシ「うふふ」
トシ、手帳を愛おしげに胸に抱く。

□釜石街道（現在）
字幕『釜石街道』

舗装もされていなくてこぼこ道。
遠く鉄道を、黒い煙をたなびかせた蒸気
機関車が走っていくのが見える。
道の脇、浦島に抱かれるようにしてうず
くまっている奇子。
奇子、糸のついた小さな操り人形を持つ
て凝視している。
離れた場所から、賢治と三郎が見守つて
いる。

賢治 「大丈夫ですか、奇子ちゃん」

浦島 「少し休めば気分もすぐれましょう」

奇子 「兄様……」

浦島 「（小声で）……どうだ」

奇子 「（無言で首を振り）」

浦島 「……そうか。ここでも無いのだな」

三郎 「……賢治」

賢治 「なんだ」

三郎 「こやつら気が許せん」

賢治 「佐々木先生の名前を出したときからそ

う思ってたさ……全くあの先生は、彼らに同

情的で困るよ。遠野物語だっていい迷惑な

のに」

三郎 「……ならばなぜ」

賢治 「俺は番犬じゃないんだぜ。仕掛けてこ

ないなら手を出す理由も無いだろう」

呆れ、道の脇に腰を下ろす三郎。

三郎 「気が長くて結構なことじゃ。だがそん

なではここは磁石のように奴ら稀人を呼

び込むようになろう」

賢治 「……仕方ないさ……それも世相だ」

浦島 「……賢治先生、何をつぶやいておられま

す？」

奇子が起きあがった。相変わらずの無表

情。

浦島 「奇子と浦島、領き合う。
……ご心配をおかけしましたなあ」

賢治「この美しい景色を見れば障りなど飛んでいくでしょ」

奇子「（背を向けて）次へ行きましょう」

浦島「これ、奇子」

肩をすくめる賢治。

賢治「フ：天然自然のスペクトルでは満足い

ただけないようですね」

浦島「やれやれですな。宮沢先生。出し惜し

みはやめませんか」

賢治「出し惜しみ」

浦島「あなたはまだ、真のイーハトヴを見せ

てくださらない」

賢治「（手で制し）止めておけ」

浦島「（手を戻し）：：：」

三郎「（手を戻し）：：：」

賢治「いいでしょう。私の心象を見せましょ

う：：」

賢治の目が帽子の下で怪しく光る。

□賢治の回想（四年前・雪）

トシの病室。

ベッドに横たわるトシ。その顔はやせ細り、唇は真っ青。

窓の外、しんしんとみぞれがふついている。

虚ろな目で見入っているトシ。

傍らに賢治。

辛そうに、トシの顔を覗き込んで。

賢治「トシ：トシ：ごめんよ：本当にごめん

よ：：」

トシ「兄さん：」

賢治「俺があんなところに行かなければ」

トシ「雨雪が：ふつています」

賢治「俺がお前を：あんなに元気だったお前

を」

トシ「兄さん、私、ずっと：：」

賢治「：：：何だい？」

トシ「：：：いいえ。何でもありません：あの雨

賢治「雨雪：きれいなね」

賢治「雨雪：？」

トシ「雨雪……とつてきてちようだい」
賢治「トシ……（涙をこらえ）おう、とつてきてやるとも」

と、部屋を飛び出す賢治。
トシ、外を眺めながら……そっと目を閉じる。
窓の外、降りやまないみぞれ。

奇子の声「宮沢先生」

□ 街道（現在）

虚ろな目で歩く賢治。

横から奇子が、賢治の顔を覗き込む。

奇子「宮沢先生」

賢治「ん、何だい」

奇子「……遠い目をされていたので」

賢治「そう……かい」

奇子「（うつむき）……見慣れた目と同じだったの」

□ 農村脇の街道

道の脇は田園風景。

遠くにわらぶきのボロ家が並ぶ。

無惨にも、枯れている田畑。

絶望的な目で、曇り空を見上げる農民。

やせ細った子供の乾いた目。

……横目に眺める奇子。

その目には感情が無い。

その、すぐ前方を歩く賢治。

浦島はさつさと歩いていく。

背後には三郎。

奇子「……」

賢治「（察して）……東北地方はずっと冷害が

奇子「……同じ国の人間なのに」

賢治「……あ、冷たいもんだ、今の時代は……見

えてるようで何も見えていない」

奇子「……いつも……子供の頃から見てきた光景だ

賢治「……いつも……」

奇子「……いつも……」

賢治「……いつも……」

奇子「……この国に置いていかれた人達」

賢治「そうか：その歳で、いろいろ見てきたんだな」

奇子「ずっと昔の話。もう忘れました」

賢治「：そういえば、ずいぶんお兄さんと年

が離れてるよね」

奇子「：」

三郎の声「さっさと歩かんかあ！ いい加減

木陰に入りたいぞ」

奇子「憎らしそうに振り返り。

三郎「どうせ腹の足しにもならん話じゃろう」

奇子「うるさいね、私は先生とお話してるの」

三郎「どうせ腹の足しにもならん話じゃろう」

奇子「！」

三郎「何ですってジジガキ！」

浦島「文句あるか高女」

奇子「（遠くから怪訝にそうに）奇子、何を

騒いでいる？」

奇子「い、いえ、何でもありません兄様」

宮沢「慌てる奇子。の三郎。

賢治「やれやれ：」

だが、どこか嬉しそうでもある。

□ 胡四王山・山道

字幕「胡四王山」

雑木林が青々と風に揺れる。

細い山道に土埃が舞う。

賢治に先導され浦島、奇子が続く。

浦島「さらに後方、三郎が緊張している。

賢治「：お気をつけて。この山の神は人を惑

わす」

浦島「惑うのは人の勝手。神はただ叫ぶのみ

でしようや。ここは私の山だとね」

賢治「：浦島さん。イーハトヴを見てなんと

します：何を望みます」

浦島「宮沢先生は書かれておられる。イーハ

トヴは心の深部において、万人の共通であ

ると。楽園を目にしたときの、人の行動は

決まっております」

怪しく笑う浦島。

賢治「樂園など、詩や童話の中で充分なのに」
そのとき。にわかには山全体がざわめきだ
した。

不穏な雰囲気、張りつめる空気。

緊張が高まっている三郎の形相。

奇子「に：兄様」

奇子の手の内。人形がひとりでに振り子
のように回っている。

驚愕する浦島。

浦島「奇子：ここが、そうなのかね」

と、奇子の肩を抱く。

奇子「（たじろぎ）はい。でも詳しくは：」

浦島「いや：充分だ：そうか：ここか：」

と、山を恍惚の目で見渡し：

浦島「クク：ハッハッハッハッハ！」

狂ったように笑う浦島。

□同（一八年前・夕）

鬱蒼とした老木が繁る。

賢治（一二）、好奇に満ちた目で森の奥

へ進んでいく。

トシ「おぼつかない足取りで追いかけてくるト

シ（一〇）。

トシ「もう日が落ちますよお」

賢治「だからおもしれえんでねえか。お前は

先に帰っておれ」

トシ「一人じゃ怒られるもの」

トシ「賢治、無視して進んでいく。」

トシ「（困って）に：さあん」

□同・奥（夕）

森から賢治が出てくると。

同心円状の、むき出しの地面。

周囲の古木が、円の中心に向かって奇妙

に曲がっている。

賢治「自然が造ったドームといった光景。」

トシ「：：：なんだあ？」

トシ「：：：：：追いついてきた。」

トシ「：：：にーさん？」
賢治「トシ、見てみれ：：：なんだべこれ？」
トシ「：：：帰りましてよう：：：町の皆も言っただも
の、日が落ちたらこの山に近づくなっ」
賢治「せばここは山男の住処かな？」
トシ「ヤメテよお」
賢治「中心に向かつて進んでいく。
木々の隙間、夕日のこもれ日がさしてい
る。」
賢治「こんなところがあるなんて聞いたことね
がったなあ：：」
トシ「泣きそうな顔で賢治を追う。
走る：：と、木の根に足をとられた。
思いつきり地面に倒れ伏すトシ。」
トシ「いっ：：たあい」
トシ「起きあがろうと顔を上げると。
小さな石塔とおぼしきもの。」
トシ「？」
賢治「賢治が何かを指差している。
それは同じような石塔。
周囲を見渡すと、石塔はドームの中でさ
らに円を描くように配置されていた。」
賢治「ここに、ひよつとして古墳でねえか？」
トシ「古墳って昔のお墓？でも胡四王山に
そんなのあるなんて聞いたこと無い：：」
賢治「やめつてばあ」
トシ「気がつけば、日が沈んでいた。
：：と、風も無いのに木々がざわめきだす。
どこからか声が響いてくる。
ほう、ほう、とうとう不気味な哄笑。
地響きのよう、低く重い声。
トシ「に：：にーさん：：何か：：来る」
賢治「う：：うん」
石塔が淡い光を放っていて：
声は二人を追いつめるように近づく：
空から声が迫ってきた。
賢治達が見上げると、雪のような白いも
のが舞っている。

賢治 「それは、身動きできず、うわあ」

トシ 「響く不気味な唱和。」

トシ 「その瞬間、賢治を突き飛ばした。」

「『それ』がトシに襲いかかる。『それ』がトシの体にまとわりつく。愕然と見ている賢治。」

「突然伏すトシ。倒れ伏すトシ。突然苦しそうに咳き込みだし：

トシ 「駆け寄る賢治。」

賢治 「トシ：トシ：トシッ！」

□賢治の寝室（現在・夜）

うなされ、ハッと飛び起きる賢治。

ふとんの上。気がつくのと、後ろ手に縛られていた。

月の薄明かり。障子に、女の長い影がのびている。奇子が、冷酷な目で見下ろしていた。

賢治 「：どういふつもりかな」

奇子 「手帳を渡して」

賢治 「手帳？」

奇子 「とぼけないで。あなたの手帳こそが、ハトヴの歴史の鍵。イーハトヴの門。イーハトヴの懐から人形が現れる。」

茶運び人形のような：だがその手には小刀。人形から糸が奇子の手にのびている。

奇子 「脅しじゃない」

賢治 「妖艶な振る舞いで、手元を動かす奇子。人形が生きているかのよう、ふとんの

賢治「横を前進していく。

賢治「人形を使って穢れを引き受けるシャー

マン、だったかな：その力をもってしてイ

奇子「ハトヴに感応したというわけか」

賢治「：知ってたの」

奇子「：意外と物知りだろ？」

賢治「：だから何と。さあ、手帳を」

賢治「人形が賢治の顔に近づいていく。目的

賢治「（無視して）兄さんの命令だろ。目的

奇子「は」

賢治「「さあね」

奇子「「なんだ、知らないのか」

賢治「「私は兄様を喜ばせるだけ。目的など関

係ないわ」

賢治「「：フン：」

奇子「「：忘れられる運命にあった私達デクの

民を、兄様は拾って下さった」

賢治「「だから、自分の人生を持たないのか」

奇子「「人形の動きが止まる。私は兄様だけのも

の」

賢治「「：まったたく、どっちが人形だ」

奇子「「瞬間の間。」

奇子「「奇子の指が蝶のようになつた。

と、人形が、賢治の首もとに小刀を押し

つける。」

奇子「「：渡す気が無いなら探す。その前にさ

よなら、宮沢賢治先生」

賢治「「どうかな」

奇子「「奇子の背後：黒い影。

闇の中、赤い目がぎらめく。

□ 羅須地人協会・教室（夜）

窓際に座り月を眺めている浦島。

賢治「曇り空に、月は隠れ気味。

賢治「の声「：：今宵の月は見栄えがしないで

しよ」

無表情に振り向く浦島。

コートに山高帽の賢治。その黒衣は闇に
 とけ込んでいる。
 浦島「（驚きもせず）：奇子はしくじったよ
 うですな」
 賢治「ご心配なく。僕の部屋で気を失ってい
 るだけです」
 浦島「あれは文字通りデクにすぎませぬ：始
 末してもらった方が都合が良いものを」
 賢治「：」
 浦島「クックック：」
 賢治「（睨みつけ）それが本性か。『海人』
 の浦島」
 浦島「：見抜いておられましたか」
 賢治「万葉集に曰く。潮干の三津の海女の久
 具津持ち：：傀儡師のルーツは海人族だ。
 簡単な推測だろう」
 浦島「（立ち上がり）なるほどなるほど：：
 いかにも。私は神代よりさらに古く、この
 島国に流れ着いた海人、アズミ族の純粋な
 る末裔である」
 賢治「アズミ族。南方系漂泊民か」
 浦島「どうやらあなたは、私のような連中と
 会いたれていないようだな」
 賢治「全く迷惑な話だ。みな俺のイーハトヴ
 を勘違いしている」
 浦島「勘違いなものですか。古来よりこの地
 は、住処を追われた者達の隠れ里だった。地
 東北の地こそ、彼らの王国だったでござい
 ましよう」
 賢治「：そんなヤツらはもういない」
 浦島「今はおらずともかつてはいた。王国の
 痕跡はいまだここにある。：それがあなた
 のイーハトヴの正体なのでしよう、宮沢先
 生！」
 賢治「だったらどうする。まつろわぬ民など
 もはやいない。今の我々は一つ：日本人だ」
 浦島「そんなのはごめんですな。私はこの地
 を再び蘇らせる。日本人が認めぬなら、我
 らの国を造るまで」
 賢治「そんなことが許されると思うのか」

浦島「やるしかない：この地に眠る歴史が証
 明されれば、認めざるを得まい：」
 賢治「：下らん。無駄だ。愚かだ。そんなこ
 とをせずとも：」
 浦島「それを許さないのだよ！ 私に流れる
 海人の血が！」
 袴を強引にはだけける浦島。
 白くひび割れた肌の腕。背中。胸。
 硬質化したそれは蛇か魚の鱗のようだ。
 呆然と見る賢治。
 浦島「子供の時からこうなのですよ：分か
 りますか先生：」
 真夜中の川。
 裸で何かから逃げ泳ぐ、少年時代の浦島。
 その肌は現在と同じくひび割れている。
 岸を振り返ると。
 闇に揺れるいくつもの提灯。
 浦島を追う人々の怒声。
 『逃がすしてはならぬ』 『あれは狂いぞ』
 『わだつみの呪いぞ』 ……
 浦島のN「私は生まれたときからこの国に拒
 まれていたのです」
 浦島「バカナ、それは：」
 賢治「サンカの民：蝦夷：山人：海人：日本
 人に帰依しない者はいずれ駆逐される。記
 紀の時代からの、この国の理からは逃れら
 れない：さあ、手帳を！」
 突然賢治に飛びかかる浦島。
 突き飛ばされる賢治、勢いよく壁に激突。
 賢治、弱々しく部屋の入り口まで這って
 いく。
 浦島「逃げるつもりですか。無駄ですな」
 賢治「（立ち上がり）逃げたりは：しない」
 浦島「ならば戦われよ。奇子を沈黙させたよ
 うに」
 賢治「：残念ながら」
 賢治「マントのように翻る、賢治のコート。
 賢治「俺は戦う力が」

賢治 「コートの背後から、小さな影が飛び出す。その影は三郎。髪も目も炎のように赤い。

手にも持っているのは長い日本刀。いつも持っているのは長い日本刀。輝く刃が、一閃。

浦島 「！」

三郎 「浦島の腕からしたたる鮮血。三郎、まだじゃあッ！」

浦島 「窓から落ちていく三郎と浦島。三郎、（不敵に笑い）誰だお前は！」

□ 羅須地人協会・庭（夜）

背中から、地面に激突する浦島。つづいて、音も無く着地する三郎。

三郎 「激痛に苦しむ浦島。賢治のお守りじゃ」

賢治 「玄関から、闇からにじみ出るように賢治が現れる。」

浦島 「死んでいたわい」

賢治 「荒っぽいなア三郎！」

浦島 「うつけもんが。わしがああしななければ」

賢治 「初めから俺の側にいた」

浦島 「怪訝に見る浦島。イーハトヴにとり憑いて離れない」

三郎 「前に見えずとも不思議は無い」

賢治 「あんたも郷土史家なら知ってるだろう。ザシキワラシの起源は、神に仕える童子だ。三郎は神に代わって俺を監視している」

賢治「他に言い方があるのか？」

三郎「ふん」

賢治「あんたの妹には最初から見えていた。さすが傀儡師だけあって、異界の者に感応しやすいわね。本物なだけある」

浦島「それではお前は何者だ？宮沢賢治」

賢治「（遠くを見やり）：あの日あんなことが無ければイーハトヴなど見つからなかった」

賢治「十八年前。苦しむトシ。トシを抱き寄せながら何も出来ない賢治。場所を見つけたせいだ」

賢治「赤く、怪しく、美しく輝く瞳：目を開くトシ」

賢治「その目に入る賢治。この地に囚われてしまつた：いや：囚われたのは俺も同じだ」

賢治「妹が死んでも、この地に眠る者達が許してくれなかつた。聞こえるんだよ、この地を永遠に幻想の檻から出すなと：イニシエからの声が。ここはまつろわぬ者の国などではない。存在しない夢、イーハトヴだ」

賢治「賢治の目は狂気さえ孕んでいて：背負う奴が、ここに集まってしまふ。せつなく、物語の中にここを閉じこめたのに」

浦島「と、浦島が再び賢治に飛びかかる：だがその眼前に三郎の刀が」

三郎「やめておけ。動かば斬る」

浦島「認めぬ！手帳を、手帳を渡せえ！」

賢治「無言で手帳を示す賢治。イーハトヴに残る遺跡の場所：この手帳にはイーハトヴにた

賢治「『声』の総てが記してある」

賢治「『声』の総てが記してある」

賢治「『声』の総てが記してある」

賢治「『声』の総てが記してある」

賢治「『声』の総てが記してある」

賢治「『声』の総てが記してある」

賢治「『声』の総てが記してある」

賢治「『声』の総てが記してある」

浦島「そ、それさえあれば！」
 賢治「フン。こんなモノで世相が変わるもんか。都合の悪い歴史は消されるだけだ。あの男、佐々木喜善にたぶらかされたか」
 浦島「ならばなぜ、自らそれを捨てぬ！」
 賢治「俺が持つていれば詩人の妄想として生きたら。言っただろう、楽園は物語の中に生きたら充分だ。夢は詩の材料にしかない」
 浦島「（目を血走らせ）私は、諦めんぞオ！」
 賢治「賢治に向かつて差しのべられる、浦島の手。三郎が顔に一閃！額から片目にかけて大きく裂けて。溢れ出る血：しかし浦島の手は止まらない。その手が賢治の首に巻きつく。浦島「ここを突き止めるのにどれだけかかったと思う！阻もうなど決して許さぬ！」
 賢治「（無表情に）それは：奇遇だ：な：俺も：許せない：」
 突如、怒りに震える賢治の目。怪訝な浦島。うずまくような轟音が近づく。浦島「いかりの音が：また青さ」
 浦島「周圍を見やる浦島。逆巻いている暴風。木々が、建物が、荒々しく揺れる。四月の気層のひかりの底を」
 賢治「浦島をさらに睨む賢治。それは凄まじい形相：むき出た歯、怨念の籠もった瞳。まさに鬼相。唾は、はき出し、ゆききする」
 N 賢治「俺は絶対に許さん」
 浦島「（おびえ）：ひ、ひい」
 ハツと振り返る浦島。刀を、上段に構えている三郎。暴風に逆立つ赤毛。

闇に輝く赤目。

N 「おれは一人の修羅なのだ」

三郎 「刀を一気に振り下ろす。暴風は突風となり、浦島を襲う。風が過ぎて、静寂。

浦島 「浦島の体から吹き出す鮮血。

浦島 「ゆっくと、崩れ落ちる浦島。無言でそれを見下ろす賢治。

浦島 「まだ：死ぬわけには」

浦島 「中空に手をさしのべる浦島。その手は月を掴もうとしている。

浦島 「なぜだ：あなたも同類でないか。イーハトヴに引き寄せられたのはあなたと妹が

浦賢治 「だから」

浦島 「分かっているでしょう。この国はもう

ましよう：若者も、女も、老人も：総てを

巻き込む」

浦島 「雲に隠れた月は姿を消し：

浦島 「それでも貴方は：ただの詩人でいられ

るのですか？」

浦島 「浦島の手が落ちた。事切れる浦島。いつまでも、見下ろす賢治。その目は、帽子のつばで隠れている。表情はうかがえない。

□ 下 根子桜・山道（夜）

三郎 「星空を眺めて歩く賢治。つまらなそうに、後ろを行く三郎。

三郎 「あの男：古代海人の末裔というワリに

賢治 「あつけないか？」

賢治 「魚鱗鮮」

三郎 「あれはヒフ病の一種で、魚鱗鮮という？」

三郎 「肌が鱗のよう」

三郎 「ちよつと待て賢治、じゃあ……」

賢治「無理も無いさ：本物を見つけてしまつては、自分が海人とも思うだろうさ」

三郎「本物？ それでは：」

賢治「傀儡師のルーツは海人：それは事実だ」
三郎「カーッ：あの女が：まっことこの世界は奇なるものよのう」

賢治「お前が言うな。妖怪」

三郎「それで：？ あのおなごはどうするのじゃ」

賢治「（悩み）そうだな。行くところ無いだ

ろうし：何とか、世話してやらなくちゃな」

三郎「キッキッキ：相変わらず甘いもう、妹

には」

賢治「お前だつて。殺さなかつたくせに」

三郎「忘れておるな。わしはお前に憑くザシ

キワラシ。共にある限りは、お前も、その

罪をも、守り続けようぞ」

微笑む賢治。どこまでも優しく。

□再び賢治の寢室（夜）

散らかっている人形。

切れている操り糸。

虚ろな目で倒れている奇子。

なぜか、人形と同じ格好である。

じつと、天井を眺め続ける。

朝日が差しはじめていた。

その目から涙が一滴、零れた。

□胡四王山・奥（早朝）

ドーム状の木々、サークル状の石塔。

十八年前と変わらない光景。

その内の一つの石塔。

さらにその裏。小さな木がある。

木は、まるで人のような形の枝ぶり。

その顔は、まるでトシのよう：悲痛な奇子の顔が、その顔に重なって。

誰かの声「愛しているのか、兄さん：」

どちらの言葉なのか、分からない。

□再び下根子桜・山道

寂しげに、一人たたずむ賢治の後ろ姿。
花巻の悠然とした空と大地が、どこまで
も拡がる。
賢治「：まことのことはうしなわれ
あかがやきの四月の底をゆききする
おれは一人の修羅なのだ」
字幕「昭和八年、詩人にして童話作家、宮沢
賢治逝去。生涯独身であった」

終